史跡 斎宮跡

平成26年度発掘調査概報

2016年3月

斎宮歴史博物館

ＳＢ10289と工事中の「さいくう平安の杜」復元建物

序

平成27年、史跡斎宮跡に、またひとつ斎宮跡の価値を実感していただける新しい場所が誕生しました。「さいくう平安の杜」は、復元された平安時代の３棟の建物を中心とした史跡公園です。今後、斎宮歴史博物館、いつきのみや歴史体験館と合わせて、斎宮跡を訪れるすべての方に、史跡斎宮跡の歴史と文化を体験していただける場所として、末永く活用していただくことを切に希望します。

さて、今回報告する発掘調査は、史跡の実態を解明するため、御館区画の南西部で行ったものです。平安時代前期にさかのぼると考えられる南北に平行する２棟の掘立柱建物を確認したほか、平安時代後期には、南側の方格地割の道路付近に建物が集中していく状況が確認できるなど、方格地割内部の実態の一端が明らかとなり、史跡斎宮跡の解明がまた一歩前進いたしました。調査で得られた成果は、地元明和町の皆様をはじめ、ひろく県民の皆様や斎宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

史跡斎宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、斎宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡斎宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2016（平成28）年３月

斎宮歴史博物館
館　長　　濱　口　尚　紀

例　　言

1　本書は、斎宮歴史博物館が平成26年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第183・184次調査）の概要をまとめたものである。

2　明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第182次調査報告書は、別途明和町が刊行している。

3　遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。

4　遺構時期区分の指標となる土器の分類と年代観については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』斎宮歴史博物館、2001年）、大川勝宏2010「斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『斎宮歴史博物館研究紀要十九』斎宮歴史博物館、大川勝宏2005「平安時代後期の斎宮跡」『明和町史　斎宮編』による。

5　斎宮跡の時期区分については土器の編年に基づき、期と段階を用いて「斎宮跡Ⅱ期第１段階」等と表記すべきであるが、本文中ではこれを簡略に「斎宮Ⅱ－1期」等と表現している。

6　遺構表示記号は次のとおりである。

　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　Pit：柱穴、ピット

7　遺物実測図は基本的に実物の４分の１で行っているが、一部の遺物は原寸大で掲載している。遺物写真は縮尺不同である。

8　土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第５版（1989年）を用いて補っている。

9　遺物の漢字表現については、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。ただし、参考文献などからの引用の場合にはこの限りではない。

10　本書の執筆は、伊藤文彦があたり、編集は調査研究課で行った。遺物写真の撮影は伊藤文彦が行った。また、発掘調査については新名強・伊藤文彦が担当し、資料整理については、大川勝宏・穂積裕昌・宮原佑治・杉原泰子・八木光代・大橋由紀が補佐した。

目　　次

Ⅰ　前言 …… 1

Ⅱ　第183・184次調査 …… 7

挿 図 目 次

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図 …… 3

第Ⅰ－２図　平成26年度発掘調査区位置図 …… 4

第Ⅰ－３図　斎宮跡方格地割区画名称図 …… 5

第Ⅰ－４図　史跡斎宮跡における大地区表示図 …… 6

第Ⅱ－１図　第183・184次調査　大地区・グリッド図 …… 7

第Ⅱ－２図　第183・184次調査　遺構平面図 …… 8

第Ⅱ－３図　第183・184次調査　土層断面図 …… 9

第Ⅱ－４図　第183・184次調査　遺物実測図（１） …… 14

第Ⅱ－５図　第183・184次調査　遺物実測図（２） …… 15

第Ⅱ－６図　第183・184次調査　t10p2 遺物出土状況 …… 16

第Ⅱ－７図　第183・184次調査　t10p70 遺物出土状況 …… 16

写 真 図 版 目 次

巻頭図版　　ＳＢ10289と工事中の「さいくう平安の杜」復元建物

写真図版１　第183次調査全景（南から）／第184次調査東トレンチ全景（北から）／
第184次調査西トレンチ全景（北から） …… 20

写真図版２　ＳＢ10299（南から）／ＳＢ10289（西から） …… 21

写真図版３　ＳＢ10770、ＳＢ10773、ＳＢ10776（西から）／ＳＢ10770、ＳＢ10773、
ＳＢ10776（北から） …… 22

写真図版４　t10p2 遺物出土状況（北から）／t10p70遺物出土状況（北から） …… 23

写真図版５　出土遺物 …… 24

表 目 次

第Ⅰ－１表　平成26年度発掘調査一覧表 …… 2
第Ⅱ－１表　第183・184次調査掘立柱建物一覧表 …… 11
第Ⅱ－２表　第183・184次調査遺構一覧表 …… 11
第Ⅱ－３表　第183・184次調査遺物観察表（１）…… 17
第Ⅱ－４表　第183・184次調査遺物観察表（２）…… 18

Ⅰ　前　　言

1　調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年３月27日に国史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度からは10月に開館した斎宮歴史博物館が史跡解明のための計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査では、史跡西部に所在すると想定される飛鳥・奈良時代の斎宮跡を解明することが課題であるほか、史跡東部に存在した方格地割と平安時代の斎宮跡中枢部の解明も重要な課題である。

近年、地元からも史跡東部の整備を望む声が高まったことから、平成18年度に「史跡整備の在り方検討会」を開催し、柳原区画を中心とした史跡東部における整備の方向が示された。そして、平成22年３月に『史跡斎宮跡東部整備基本計画書』が策定され、平成23年度からは現地での工事に着手して平成27年10月、史跡公園「さいくう平安の杜」が竣工した。

一方、明和町でも「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取組み、平成24年６月６日に国の認定を受けた。同計画では、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした整備を計画しており、平成27年度から工事に着手している。さらに、平成27年４月24日「祈る皇女斎王のみやこ斎宮」が日本遺産に認定された。

発掘調査

史跡東部の方格地割の内部構造の解明は斎宮跡調査の中での重要な課題の一つである。御館区画においては、これまでの調査で、御館区画では斎宮跡Ⅱ期第１段階から斎宮跡Ⅲ期にかけて継続的に建物群が造営されていること、斎宮跡Ⅱ期第３段階以降、特に斎宮跡Ⅲ期以降は建物群が区画南辺道路から20m付近に集中することが指摘されている。一方区画の南西部や区画の北半など、調査の及んでいない範囲が広く残されおり、区画内部の利用状況の実態解明にはまだ至っていない現状がある。

上記の課題を受け、御館地区の実態解明を目的として、第183・184次調査を実施した。調査面積は、第183次調査が242.4㎡、第184次調査が163.3㎡、合計405.7㎡、調査期間は第183次調査が平成26年７月23日～11月14日、第184次調査が平成26年12月２日～平成27年２月16日であった。

整備

史跡東部整備事業は、柳原区画の発掘調査で確認した掘立柱建物３棟の復元や平安時代の方格地割の広がりを示す区画道路の整備など、平安時代の斎宮の姿を再現するもので、平成26年度は、平成25年度に着手した復元建物建設工事を継続した。また、平成27年度の着手を目指して、斎宮歴史博物館と上園芝生広場を結ぶ古代伊勢道（旧称：奈良古道）の整備にかかる実施設計を行った。

発掘調査現場の公開・活用

近年斎宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上を目標として、発掘調査現場の積極的な活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や夏休み子ども体験発掘教室、学校団体等の体験発掘を開催している。

2　調査体制

史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課が担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

平成26年度

大川勝宏（課長）
穂積裕昌（主幹兼課長代理）
新名　強（主査）
伊藤文彦（技師）

平成27年度

大川勝宏（課長）

穂積裕昌（主幹兼課長代理）

伊藤文彦（技師）

宮原佑治（技師）

3　斎宮跡調査研究指導委員会

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成26年９月９日、平成27年３月３日の２回、委員会を開催し、第183・184次調査を含む御館区画の性格や明和町の整備事業について指導や助言を得たほか、復元建物については斎宮跡研究員も同席して指導を受けた。指導委員・研究員の方々は下記のとおりである。

〔指導委員〕

浅野　聡（三重大学大学院准教授）

稲葉信子（筑波大学大学院教授）

金田章裕（人間文化研究機構機構長）

佐々木恵介（聖心女子大学教授）

鈴木嘉吉（元奈良国立文化財研究所長）

所　京子（岐阜聖徳学園大学名誉教授）

八賀　晋（三重大学名誉教授）

増渕　徹（京都橘大学教授）

松村恵司（奈良文化財研究所長）

渡辺　寛（皇學館大学名誉教授）

綿貫友子（大阪教育大学教授）

〔研究員〕

黒田龍二（神戸大学大学院教授）

（五十音順・敬称略）

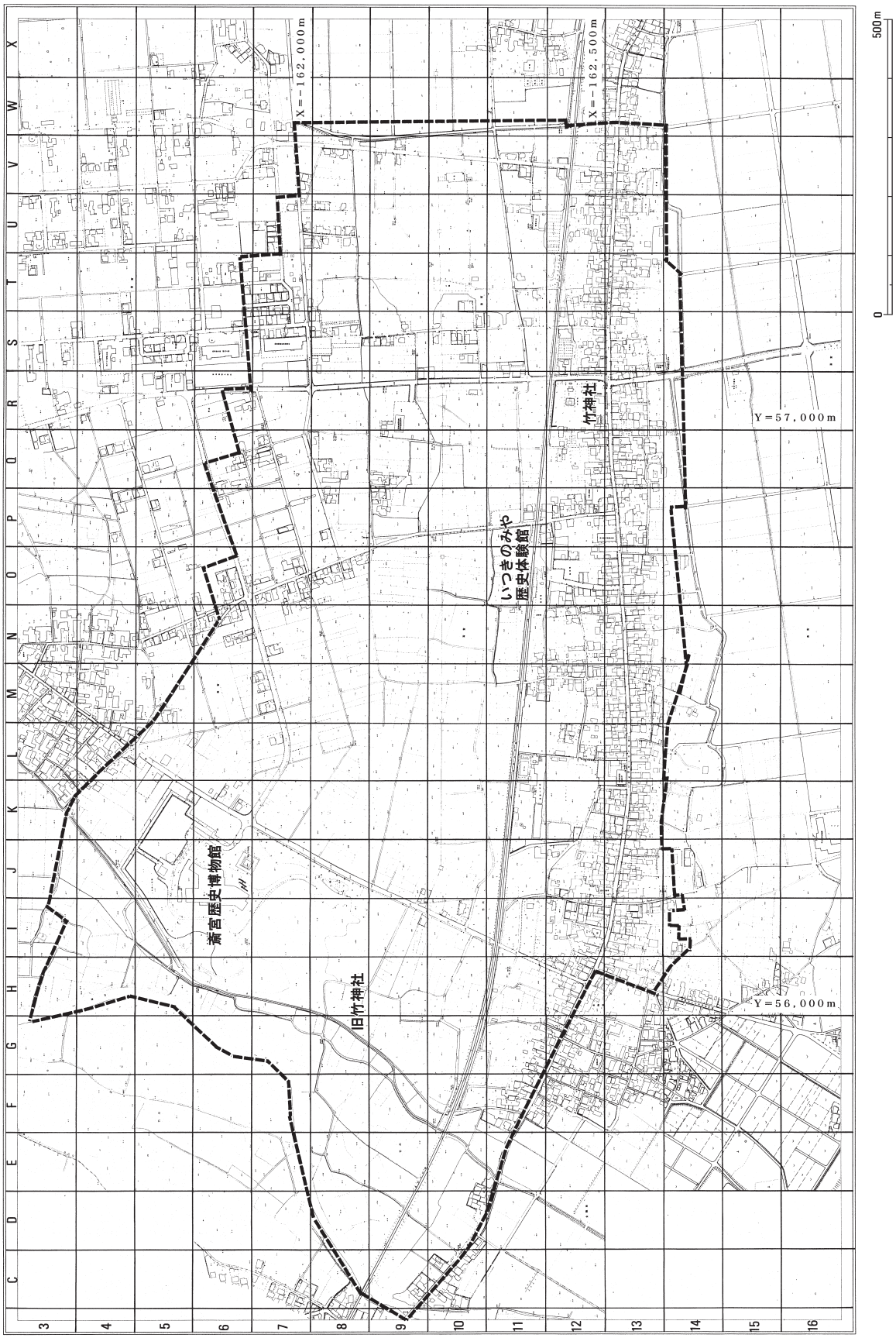
調査次数	地区	面積（㎡）	調査期間	位置	土地所有者	現状変更	保存地区区分
183	P11	242.4	H26.7.23～11.14	明和町大字斎宮字御館	明和町	計画発掘調査	1
184	P11	163.3	H26.12.2～H27.2.16	明和町大字斎宮字御館	明和町	計画発掘調査	1
182-1	M12	235.1	H26.4.8～7.24	明和町大字竹川字中垣内	個人	太陽光発電	3
182-2	H10,H11	46.6	H26.4.23～5.8	明和町大字斎宮字古里	個人	住宅新築	3
182-3	M11	37.2	H26.5.30～6.11	明和町大字斎宮字古里	個人	住宅新築	3
182-4	S13	1.8	H26.6.23	明和町大字斎宮字内山	鉄道会社	改札口設置	4
182-5	U8	88.7	H26.7.4	明和町大字斎宮字楽殿、西加座、柳原地内	明和町	休憩所建設等	1,3
182-6	G11	107.5	H26.7.14～8.6	明和町大字竹川字中垣内	個人	太陽光発電	3
182-7	I9	97.3	H26.10.7～11.28	明和町大字斎宮字内山	明和町	休憩所建設等	3
182-8	L6	32.7	H26.11.28	明和町大字竹川字東裏	明和町	排水管	3
182-9	N13	1.4	H26.12.20	明和町大字斎宮字内山	鉄道会社	信号機建替	4
182-10	J12	5.0	H27.1.6～2.9	明和町大字斎宮字牛葉	個人	住宅新築	4
182-11	R7,S7	12.1	H27.1.6～1.13	明和町大字斎宮字東前沖	個人	駐車場	3
182-12	P11	104.7	H27.1.26～	明和町大字斎宮字御館	土地開発公社	発掘調査	1
182-13	W13	30.1	H27.1.29～2.3	明和町大字竹川字古里	個人	住宅新築	3
182-14	K4	51.6	H27.2.27～3.14	明和町大字斎宮字中西	個人	住宅新築	4
182-15	K12,K13	13.3	H27.3.10～3.11	明和町大字斎宮字御館	明和町	史跡整備	1
182-16	L11	2.9	H27.3.3	明和町大字斎宮字中西	個人	浄化槽	4

第Ⅰ－１表　平成26年度　発掘調査一覧表

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図（1:50,000）　国土地理院発行1/25,000「松阪」「明野」（平成４年）より

第Ⅰ－２図　平成26年度発掘調査区位置図（1:10,000）

第Ⅰ－３図　斎宮跡方格地割区画名称図（1:5,000）



第Ⅰ－４図　史跡斎宮跡における大地区表示図（2002年）

Ⅱ　第183・184次調査
６ＡＰ11御館地区

１　はじめに

第183・184次調査区は、平安時代斎宮の方格地割でいう御館区画の南西部に位置する。御館区画ではこれまでに、第８－９次、19次、55次、94次、121－３次、129次、158次、172次の８回の調査が行われている。これまでの調査で、御館区画では斎宮Ⅱ－１期から斎宮Ⅲ期にかけて継続的に建物群が造営されていること、斎宮Ⅱ－３期以降、特に斎宮Ⅲ期以降は建物群が区画南辺道路から20m付近に集中することが指摘されている。第183次調査は御館地区の実態解明を目的として、平成23年度第172次調査の西側を調査した。また、第184次調査は第183次調査で検出した建物の規模の確認等を目的として、第183次調査区の東西隣接地において実施した。以下、第183・184次の調査結果をまとめて報告する。なお、第183次調査の調査面積は242.4㎡、調査期間は平成26年７月23日～11月14日、第184次調査の調査面積は163.3㎡、調査期間は平成26年12月２日～平成27年２月16日であった。

２　地形と層位

調査区は現況畑地の平坦地である。調査区の南端で標高約11m、北端で標高10.5mであり、緩やかに北側に傾斜している。なお、調査区のすぐ北側で比高差0.5mほどの段差がある。段差の下部では平成26年度に第182－12次調査を行い、遺構が確認されているが、それより北側には低地が広がっている。

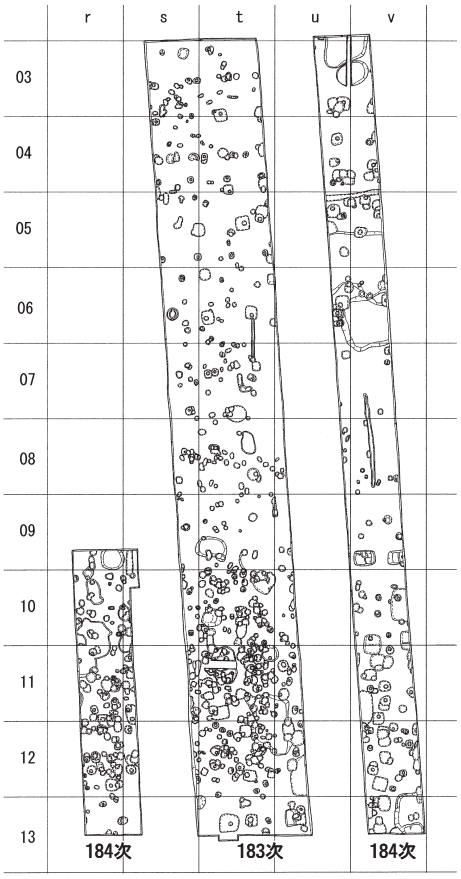
基本層序は、表土(耕作土)、包含層、地山である。調査区南端では表土下約0.15mの標高約11mで地山面が確認でき、耕土直下が地山面で包含層は存在しない。一方、北端では表土下約0.4mの標高約10.2mで地山面を確認した。地山は明黄褐色粘質土で、いわゆる黒ボク層は認められない。遺構は地山上面で検出した。

３　遺構

第183・184次調査では、掘立柱建物11棟、土坑27基、溝５条を確認した。遺構の時期は平安時代初頭から平安時代末に及ぶ。調査区の中でも南半分に多数の柱穴が認められたが、調査面積が限られていたため、認識できた掘立柱建物数は限定的であった。

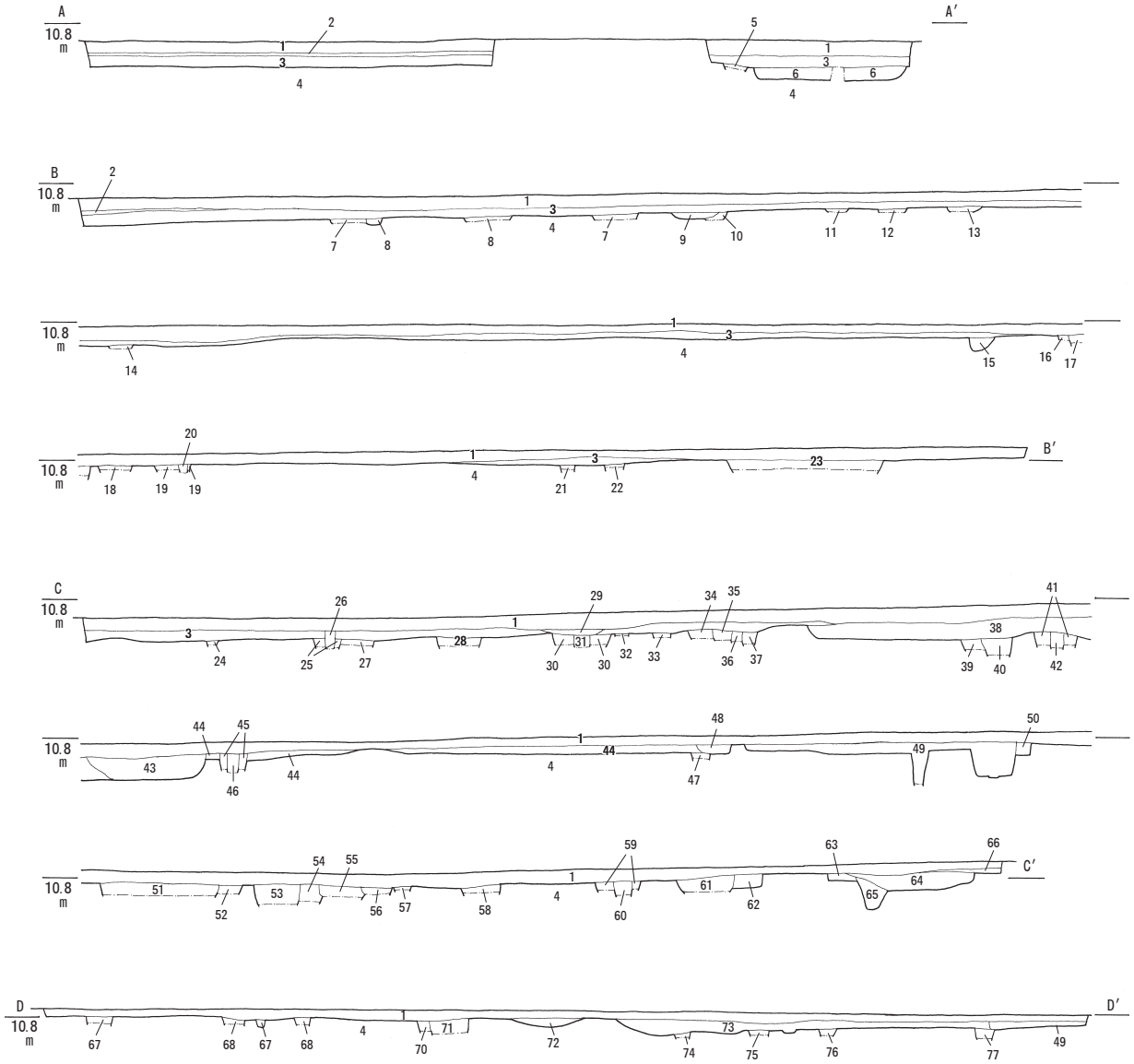
（１）斎宮Ⅱ－１期の遺構

ＳＢ0307　調査区中央で検出した５間×２間の東西棟の掘立柱建物である。昭和49年度第８－９次調査で検出され、第172次調査で建物規模が確定している。柱間寸法は桁行約2.1m、梁間約2.1m。出土遺物から斎宮Ⅱ－１期に属する建物であることが判明している。今次調査では新たに２つの柱穴を確認した。建物の方位は梁間方向で約Ｎ４°Ｗである。



第Ⅱ－1図　第183・184次調査
大地区・グリッド図（1:400）

第Ⅱ－２図　第183・184次調査　遺構平面図（1:200）



1　10YR5/3 にぶい黄褐色土しまり弱い【耕土】
2　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土しまり良い
3　10YR3/3 暗褐色土【包含層】
4　7.5YR5/8 明褐色粘質土【地山】
5　10YR4/1 褐灰色砂質土
6　2.5Y4/1 黄会食砂質土粘性あり
7　10YR2/1 黒色土
8　10YR3/3 暗褐色土
9　10YR3/4 暗褐色土
10　10YR3/3 暗褐色土に 10YR7/8 黄橙色粘土ブロックが 40%混じる
11　10YR2/2 黒褐色土に 10YR7/8 黄橙色粘土ブロックが 5%混じる
12　10YR4/3 にぶい黄褐色土
13　10YR2/3 黒褐色土に 10YR8/6 黄橙色粘土ブロックが 5%混じる
14　10YR7/4 にぶい黄橙色土
15　10YR4/3 にぶい黄褐色土
16　10YR4/3 にぶい黄褐色土に 10YR7/6 明黄褐色粘質土が 7%混じる
17　10YR2/2 黒褐色土
18　10YR3/3 暗褐色土に 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロックが 7%混じる
19　10YR3/3 暗褐色土に 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロックが 7%混じる
20　10YR4/3 にぶい黄褐色土
21　10YR3/3 暗褐色土
22　10YR3/2 黒褐色土に 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロックが 40%混じる
23　10YR3/1 黒褐色土
24　10YR5/2 灰黄褐色砂質土
25　10YR4/2 灰黄褐色砂質土
26　10YR6/2 灰黄褐色砂質土に 10YR8/6 黄橙色シルトブロックをやや含む
27　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
28　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土に 10YR7/6 明黄褐色シルトブロックをやや含む
29　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土
30　10YR4/2 灰黄褐色砂質土に地山粘土ブロックを多く含む
31　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
32　10YR4/2 灰黄褐色砂質土
33　10YR4/2 灰黄褐色砂質土
34　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
35　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土に地山粘土ブロックを少し含む
36　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土に地山粘土ブロックを少し含む
37　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土
38　2.5Y3/2 黒褐色砂質土粘性あり
39　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土地山ブロックを多く含む
40　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土地山ブロックをやや含む
41　10YR4/1 褐灰色砂質土地山粘土ブロックを多く含む
42　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
43　10YR3/1 黒褐色砂質土粘性あり
44　2.5Y5/4 黄灰色砂質土
45　10YR5/2 灰黄褐色砂質土
46　10YR 4/2 灰黄褐色砂質土に地山粘土ブロックをやや含む
47　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土
48　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土
49　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土【8－9 次調査埋戻し土】
50　10YR4/2 灰黄褐色砂質土
51　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
52　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
53　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土に地山粘土ブロックをやや含む
54　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土に地山粘土ブロックをやや含む
55　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
56　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土
57　2.5Y4/1 黄灰色砂質土
58　2.5Y5/3 黄灰色砂質土
59　10YR4/2 灰黄褐色砂質土に地山粘土ブロックを少し含む
60　10YR4/2 にぶい黄褐色砂質土
61　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土
62　10YR3/3 暗褐色砂質土
63　10YR5/2 灰黄褐色砂質土
64　10YR5/2 灰黄褐色砂質土に 7.5YR7/6 橙色粘土ブロックを含む
65　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土に 7.5YR7/6 橙色粘土ブロックを多く含む
66　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土
67　10YR4/1 褐灰色砂質土
68　10YR4/2 灰黄褐色砂質土
69　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
70　10YR4/2 灰黄褐色砂質土に 10YR7/6 明黄褐色シルトブロックを少し含む
71　10YR4/2 灰黄褐色砂質土に 10YR7/6 明黄褐色シルトブロックを多く含む
72　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
73　10YR4/1 褐灰色砂質土に 10YR7/6 明黄褐色シルトブロックを少し含む
74　10YR5/2 灰黄褐色砂質土に地山粘土ブロックをやや含む
75　10YR5/2 灰黄褐色砂質土
76　10YR4/2 灰黄褐色砂質土、炭・土器混じる
77　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土

0　5m

第Ⅱ－３図　第183・184次調査　土層断面図（1:100）

ＳＢ10289　調査区北で検出した５間×３間の東西棟で、５間×２間の身舎に南に１間分の庇出がつく庇付建物である。第172次調査で東側の柱列のみを検出していたが、本次調査で建物の規模が明らかとなった。身舎の柱掘形は一辺0.6～0.7mの隅丸方形で直径20～25㎝程度の柱痕跡が認められる。庇の柱掘形は一辺0.4～0.5mの略方形で直径18㎝程度の柱痕跡が認められる。柱間寸法は桁行方向が2.36m（約８尺）、梁間方向が身舎は2.4m（約８尺）、庇は2.8m（約9.5尺）である。建物の方位は梁間方向で約Ｎ６°Ｗである。斎宮Ⅱ－１期に属する遺構であると考えられる。

ＳＢ10299　調査区南端で検出した東西棟の掘立柱建物である。第172次調査で桁行３間の南北建物として報告されたＳＢ10299が桁行５間×梁間２間の建物規模となることが明らかとなった。柱間寸法は桁行、梁間ともに約2.36m（約８尺）。建物の方位は梁間方向で約Ｎ６°Ｗである。柱掘形は一辺約0.6～0.7mの隅丸方形を呈し、直径約18～約30㎝の柱痕跡が認められる。斎宮Ⅱ－１期に属する遺構と考えられる。

ＳＫ10799　v13で検出した土坑である。平面形は長径0.9m、短径0.6m以上の略円形を呈する。南側が調査区外へ続く。埋土からは土師器皿が出土した。

（２）斎宮Ⅱ－３期の遺構

ＳＢ10770　調査区北端で検出した東西棟の掘立柱建物である。建物規模は桁行４間×梁間２間、柱間寸法は桁行、梁間ともに、約2.0m。建物の方位は梁間方向で約Ｎ６°Ｗである。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を呈する。柱穴出土遺物からは斎宮Ⅱ－３期の遺構と考えられる。

ＳＫ10791　u3, v3で検出した土坑である。平面形は東西2.1m、南北1.6m以上の略方形を呈する。北側は調査区外へ続く。深さは0.2mを測る。埋土からは土師器皿、土師器甕、須恵器が出土した。

ＳＫ10793　u5～v7で検出した土坑である。平面形は南北幅約３mの略方形を呈し、東西両側が調査区外へ続く。深さは0.2mを測る。埋土からは土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した。

ＳＫ10794　v10で検出した土坑である。平面形は南北1.8m、東西１m以上の方形を呈する。東側が調査区外へ続く。埋土からは土師器皿、暗文土師器、土師器甕、灰釉陶器が出土した。

（３）斎宮Ⅱ－４期の遺構

ＳＢ10290　調査区北東で検出した東西棟の掘立柱建物である。第172次調査で桁行３間以上の東西建物として報告されたＳＢ10290の西側柱穴が検出され、桁行５間×梁間２間の建物規模が確定した。

（４）斎宮Ⅱ期の遺構

ＳＢ10771　調査区北で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約1.8m、梁間約２m。建物の方位は梁間方向で約Ｎ２°Ｗである。柱掘形は一辺約0.2mの隅丸方形を呈する。調査区西側へ続くと考えられ、建物の規模は桁行４間以上×梁間２間である。斎宮Ⅱ期後半に属する遺構と考えられる。

ＳＢ10772　調査区北で検出した南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約2.3m。建物の方位は桁行方向で約Ｎ２°Ｗである。柱掘形は直径0.2mの略円形を呈する。調査区の西側に続くと考えられ、建物の規模は桁行３間×梁間１間以上と考えられる。斎宮Ⅱ期に属する建物であると考えられる。

（５）斎宮Ⅲ－１期の遺構

ＳＢ10773　調査区北端で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約2.1m、梁間約２m。建物方位は梁間方向で約Ｎ５°Ｗである。柱掘形は直径約0.2mの略円形を呈する。調査区の西側に続くと考えられ、建物の規模は桁行２間以上×梁間２間である。出土遺物からは斎宮Ⅲ－１期の遺構と考えられる。

ＳＫ10778　t11～u12で検出した土坑である。平面形は長径3.2m、短径２mの略方形を呈し、深さは0.2mを測る。土師器、須恵器、灰釉陶器、無釉陶器、白磁、ロクロ土師器、土錘、碁石形石製品、鉄製品が出土した。

（６）斎宮Ⅲ－２期の遺構

ＳＫ10797　v13で検出した土坑である。平面形は南北２m、東西1.6m以上の略方形を呈する。東側が調査区外へ続く。埋土からは土師器、灰釉陶器が出土した。

（７）斎宮Ⅲ－３期の遺構

ＳＢ10774　調査区西南部で検出した掘立柱建物である。昭和49年度第８－９次調査で検出されたもの

遺構名	調査時遺構名	ピット番号 ※(　)はグリッド番号	時期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法 (m)	主軸	方位 (N規準)	備考
ＳＢ0307	ＳＢ0307	(v10)p9, p10	Ⅱ－1	5(10.5)×2(4.2)	(桁行) 2.1 (梁間) 2.1	東西	N4°W	
ＳＢ10289	ＳＢ10289	(t5)p3/(t6)p2/(t7)p1, p5/(u7)p1/(v7)p1/(u6)p4/(u5)p4/(v5)p4	Ⅱ－1	5(11.8)×3(7.6)	(桁行) 2.36 (梁間) 2.4 (庇) 2.8	東西	N6°W	庇付建物 ＳＢ10290よりも古 ＳＫ10795よりも古
ＳＢ10299	ＳＢ10299	(t13)p2/(u13)p5/(v13)p1/(v11)p17/(w11)p10/(w12)p4/(w13)p3	Ⅱ－1	5(11.8)×2(4.72)	(桁行) 2.36 (梁間) 2.36	東西	N6°W	
ＳＢ10770	建物１	(t3)p6, p8/(t4)p1, p2, p9/(u3)p2/(v3)p2/(u4)p2/(v4)p4	Ⅱ－3	2(2.0)×4(2.0)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.0	東西	N6°W	
ＳＢ10771	建物４	(s4)p1, p9/(t4)p6, p8/(s5)p1/(t5)p1, p2, p8	Ⅱ期後半	?(-)×2(4.0)	(桁行) 1.8 (梁間) 2.0	東西	N2°W	
ＳＢ10290	SB10290	(v5)p3	Ⅱ－4	5(9.0)×2(3.6)	(桁行) 1.8 (梁間) 1.8	東西	N2°W	ＳＢ10289よりも新
ＳＢ10772	建物５	(s6)p2, p5/(s7)p3	Ⅱ期	3(6.9)×?(-)	(桁行) 2.3 (梁間) -	南北	N2°W	
ＳＢ10773	建物３	(s3)p2, p6/(s4)p2, p3, p10	Ⅲ－1	?(-)×2(4.0)	(桁行) 2.1 (梁間) 2.0	東西	N5°W	ＳＢ10777よりも古
ＳＢ10774	建物６	(r10)p14	Ⅲ－3	4(8.0)×2(4.0)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.0	東西	N3°W	ＳＫ10801よりも古 ＳＫ10803よりも古
ＳＢ10775	建物７	(r11)p16/(s11)p3, p6/(r12)p5, p6/(s12)p3	Ⅲ－3	?(-)×2(4.2)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.1	東西	N4°W	
ＳＢ10776	建物２	(s3)p1, p3/(t3)p2/(s4)p6, p11/(t4)p5, p7	Ⅲ期	2(4.4)×3(6.6)	(桁行) 2.2 (梁間) 2.0	東西	N5°W	ＳＢ10773よりも新
ＳＢ10777	建物８	(r11)p11/(s11)p7/(r12)p2/(s12)p1	Ⅲ期	?(-)×2(4.4)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.2	東西	N4°W	

第Ⅱ－１表　第183・184次調査　掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
ＳＫ10778	183次 土坑１	t11～u12	Ⅲ－1	土師器、須恵器、灰釉陶器、無釉陶器、磁器、ロクロ土師器、土錘、碁石状石製品、鉄製品	ＳＢ10299より新
ＳＫ10779	183次 土坑２	u12	Ⅲ期	土師器、須恵器、ロクロ土師器	ＳＫ10778より新
ＳＫ10780	183次 土坑４	t11	Ⅲ－3	土師器、須恵器、無釉陶器、ロクロ土師器、瓦器	
ＳＫ10781	183次 土坑５	t10	Ⅲ－3	土師器、ロクロ土師器	
ＳＫ10782	183次 土坑７	u12		土師器小片	ＳＫ10783より古
ＳＫ10783	183次 土坑８	u12		土師器小片	ＳＫ10782より新
ＳＫ10784	183次 土坑９	u12		土師器小片、緑釉陶器	
ＳＫ10785	183次 土坑10	t11, u11	Ⅲ期	土師器、須恵器、ロクロ土師器	
ＳＫ10786	183次 土坑11	t10	Ⅱ期	土師器、台付杯、須恵器、灰釉陶器、	
ＳＫ10787	183次 土坑12	t8		土師器	
ＳＫ10788	183次 土坑13	t7, t8	Ⅱ期	土師器、須恵器	
ＳＤ10789	183次 溝１	s11	Ⅲ期	土師器、須恵器	
ＳＤ10790	183次 溝２	t7, t6	不明	遺物なし	
ＳＫ10791	184次 土坑１	u3, v3	Ⅱ－3	土師器皿、土師器甕、須恵器	
ＳＫ10792	184次 土坑２	u3, v3		土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器	
ＳＫ10793	184次 土坑３	u5～v7	Ⅱ－3	土師器、須恵器、灰釉陶器	ＳＢ10290よりも古
ＳＫ10794	184次 土坑４	v10	Ⅱ－3	土師器皿、土師器甕、灰釉陶器	
ＳＫ10795	184次 土坑５	u6～v7		土師器	ＳＢ10289よりも新
ＳＫ10796	184次 土坑７	v13		土師器	
ＳＫ10797	184次 土坑８	v13	Ⅲ－2	土師器、灰釉陶器	
ＳＫ10798	184次 土坑９	v11, v12		土師器	
ＳＫ10799	184次 土坑10	v13	Ⅱ－1	土師器皿	
ＳＫ10800	184次 土坑11	r10	Ⅲ期	土師器皿、ロクロ土師器、灰釉陶器、白磁椀、青白磁	ＳＢ10774よりも新
ＳＫ10801	184次 土坑12	r10	Ⅲ期	土師器、ロクロ土師器、須恵器	
ＳＫ10802	184次 土坑13	r10	Ⅲ期	土師器、ロクロ土師器	ＳＢ10774よりも新
ＳＫ10803	184次 土坑14	r11		土師器	
ＳＤ10804	184次 溝１	v5, u5		土師器	
ＳＤ10805	184次 溝２	v7, v8		土師器	
ＳＤ10806	184次 溝３	s10		土師器・須恵器	

第Ⅱ－２表　第183・184次調査　遺構一覧表

で、すでに東西桁行４間であることが判明している。今回の調査では南北梁間２間の建物であることが判明した。柱間寸法は桁行約2.0m、梁間約2.0m。建物の方位は梁間方向で約Ｎ３°Ｗである。柱掘形は0.2mの略円形を呈する。出土遺物から斎宮Ⅲ－３期に属する遺構であると考えられる。

ＳＢ10775　調査区西南端で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約2.0m、梁間約2.1m。建物の方位は梁間方向で約Ｎ４°Ｗである。柱掘形は直径0.2mの略円形を呈する。調査区西側へ続くと考えられ、建物の規模は桁行２間以上×梁間２間であると考えられる。斎宮Ⅲ－３期に属する遺構であると考えられる。

ＳＫ10780　t11で検出した土坑である。平面形は長径２m、短径1.7mの略円形を呈する。埋土からは土師器、須恵器、無釉陶器、ロクロ土師器、瓦器が出土した。

ＳＫ10781　t10で検出した土坑である。平面形は長径0.5m、短径0.4mの略円形を呈する。埋土からは土師器、ロクロ土師器が出土した。

（８）斎宮Ⅲ期の遺構

ＳＢ10776　調査区北端で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約2.2m、梁間約2.0m。建物方位は梁間方向で約Ｎ５°Ｗである。柱掘形は直径約0.2mの略円形を呈する。調査区内で検出しているのは、桁行２間の範囲だが、東側の第184次調査区でその続きが検出されていないことから、桁行３間の規模におさまると考えられる。出土遺物からは斎宮Ⅲ期に属する建物であると考えられる。

ＳＢ10777　調査区西南端で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約2.0m、梁間約2.2m。建物の方位は梁間方向で約Ｎ４°Ｗである。柱掘形は直径約0.2mの略円形を呈する。調査区西側へ続くと考えられ、建物の規模は桁行２間以上×梁間２間である。斎宮Ⅲ期に属する建物であると考えられる。

ＳＫ10800　r10で検出した土坑である。平面形は長径1.9m、短径1.6m以上の不整形を呈する。西側が調査区外へ続く。埋土からは土師器皿、ロクロ土師器、灰釉陶器、白磁椀、青白磁が出土した。

ＳＫ10802　r10で検出した土坑である。平面形は長径1.5m、短径0.6mの略楕円形を呈する。埋土からは土師器、ロクロ土師器が出土した。

４　遺物

遺物は183次調査でコンテナバット41箱、184次調査で19箱出土している。大半は土坑からの出土遺物であるが、ピット出土遺物には良好な一括性を示すものが含まれており、それらについても報告する。

ＳＢ10770出土遺物（１～５）　（１）は灰釉陶器の底部である。三日月状の高台を持ち、釉はハケヌリと見られる。（２）は灰釉陶器の底部である。細く高い高台が取りつく。（３）～（５）は土錘である。

ＳＢ10771出土遺物（６）　（６）はいわゆる志摩式製塩土器である。平坦な底部に垂直に胴部が取りつき、内外面ともナデ調整であるが、粘土の接合痕跡を明瞭に残す。底部と体部に煤の付着痕跡を認める。斎宮Ⅱ期に属するものとみられる。

ＳＢ10773出土遺物（７～９）　（７）は灰釉陶器の底部である。低短な高台がつき、断面は三日月状を呈する。底面に明瞭な糸切痕がみられる。猿投用編年第Ⅳ期第1小期（Ｏ－53）のものか。（８）はロクロ土師器の台付小皿である。わずかに口縁部がななめ上方に持ち上がる。底部は残存しない。（９）は土錘である。遺構は斎宮Ⅲ－１に属するだろう。

ＳＢ10774出土遺物（10）　（10）は土師器皿である。口縁部をヨコナデし、端部はまるくおさめる。斎宮Ⅲ－３期に属するとみられる。

ＳＢ10775出土遺物（11）　（11）は土師器小皿である。口縁端部をヨコナデする。斎宮Ⅲ－３期に属する。

ＳＫ10799出土遺物（12）　（12）土師器皿Ａである。平坦な底部に口縁部が立ち上がり、端部は丸く収める。底部にはケズリが認められる。斎宮Ⅱ－１期の所産。

ＳＫ10793出土遺物（13～15）　（13）は土師器杯Ａである。底部からやや外傾する口縁部が立ち上がり、口縁端部は上方に面を持つ。底部はナデ調整でケズリは認められない。斎宮Ⅱ－３期に属する。（14）は土師器甕である。丸みをもつ胴部に短く外傾する口縁部が付き、口縁端部はわずかにつまむ。（15）は土錘である。

ＳＫ10793出土遺物（16～21）　(16) は土師器杯Ａである。口縁部はヨコナデにより強く外反し、端部は面を持つ。(17) は土師器椀Ａである。体部は丸みを持ち、内湾して口縁端部は上面にむかって面を持つ。外面は口縁端部直下のみヨコナデ、それより下は指頭圧痕の残るナデである。体部内面には放射状の、底部付近にはらせん状の暗文がみとめられる。斎宮Ⅱ－２～Ⅱ－３期に属すると考えられる。(18) (19) は土師器甕である。(18) は口縁部は短く外傾し、端部はつまみ上げる。(19) は口縁部は水平近くにまでひらき、端部には面を持つ。(20) は灰釉陶器の段皿である。シャープな作りでやや黄色がかった釉色を示す。(21) は灰釉陶器椀の底部である。高台は細くシャープに立ち上がる。いずれも斎宮Ⅱ－３期に属するとみてよいだろう。

ＳＫ10791出土遺物（22～26）　(22) は土師器杯Ａである。口縁部はヨコナデにより強く外反するが、口縁端部はまるく収まる。(23) は土師器皿Ａである。底部から口縁部が短く立ち上がり、強く外反して口縁端部は上方に面をもつ。内外面ともに、口縁部のみヨコナデ。その他はナデ調整。(24)～(26) は土師器甕である。(24) は胴部は歪な球形で、口縁部は肉厚で外傾し強くヨコナデされる。(25) は丸みをもつ胴部に短く外傾する口縁部が取りつく。口縁端部は面を持ち、上方につまみ上げる。(26) は歪な球形の胴部から口縁部が強く外傾し、やや外反気味に立ち上がり、端部には面を持つ。いずれも、斎宮Ⅱ－３期に属すると考えられる。

ＳＫ10778出土遺物（27～31）　(27) は土師器皿である。口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部は上方に面を持つ。口縁端部外面に煤の付着がみられる。(28) は土師器杯である。体部は内湾し、口縁端部直下をヨコナデする。端部はまるく納める。(29) は灰釉陶器椀の底部である。高台は幅がせまく高く立ち上がる。(30) 土錘である。(31) は碁石とみられる石製品である。不整形な円形を呈し、片面は平滑、反対面はやや膨らみを持つ。全体を丁寧に研磨する。石材は凝灰岩と思われ、緑色を呈する。いずれも斎宮Ⅲ－１期頃に属するだろう。

ＳＫ10780出土遺物（32・33）　(32) は土師器椀である。体部は内湾して立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。体部には指頭圧痕が残り、口縁部直下のみヨコナデする。内面はナデ調整。(33) は瓦器椀の底部小片である。低短な高台で断面は黒色を呈する。小片のため、調整は判然としない。いずれも斎宮Ⅲ－３期に属するとみておく。

ＳＫ10800出土遺物（34～39）　(34) は土師器皿である。口縁直下のみヨコナデし、外面に面を持つ。残存状況が悪く、口径は図より小さくなる可能性もある。(35) は灰釉陶器椀の底部である。やや丸みのある胴部に低短な高台がつき、底面には糸切痕が残る。(36) はロクロ土師器の底部である。焼成は軟調で、底部に明瞭な糸切痕が見られる。(37) はロクロ土師器の底部である。低く太い高台を添付する。焼成は軟調である。(38) は台付皿の皿部とみえるが判然としない。器壁の磨滅が著しい。(39) は白磁椀である。体部はやや直線的で、口縁端部は断面三角形で大きく肉厚の縁をもつ。胎土は荒く黒色粒を含み、白色釉が厚く施釉される。太宰府での型式分類で白磁椀Ⅳ類該当すると考えられる。時期はややばらつきがあるようにも見受けられるが、概ね斎宮Ⅲ－２～Ⅲ－３期に属するだろう。

ＳＫ10781出土遺物（40～42）　(40) は土師器杯である。口縁部がやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデし、外側に面をもつ。(41) は土師器椀である。内湾する胴部に、ハの字に開く高台が取りつく。内面、外面ともにナデ調整。内面に重ね焼きの痕跡を認める。(42) は陶器椀の底部である。底部には輪状の粘土紐を張り付けたごく低短な高台が取りつく。陶器であるが色調は白っぽく軟調である。全体に斎宮Ⅲ－３期の土器とみておく。

ＳＫ10797出土遺物（43）　(43) は土師器皿である。平坦な底部からわずかに口縁部が立ち上がり、端部は丸く収める。口縁部のみヨコナデし、それ以外はナデ調整。斎宮Ⅲ－２期頃に属するだろう。

ＳＫ10802出土遺物（44）　(44) ロクロ土師器の底部である。焼成は軟調で、底部に明瞭な糸切痕が見られる。斎宮Ⅲ期の土器である。

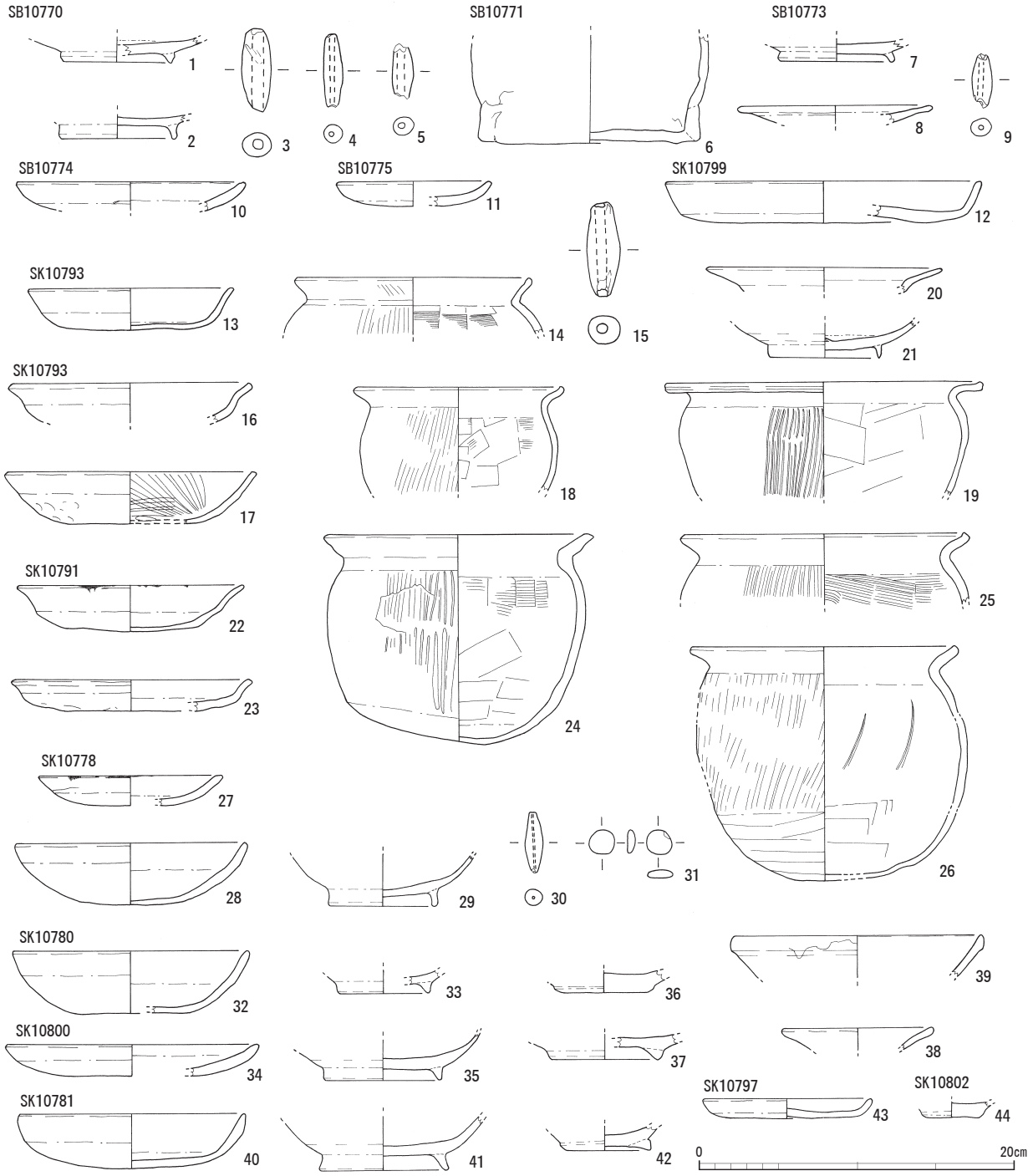
ピット出土遺物

t10p3 出土遺物（45～48）　(45)～(47) は土師器杯である。(45) は口縁端部直下をわずかにヨコナ

デして面をもち、端部も上面に面をもつ。(46) は体部は内湾し、口縁端部外面直下をヨコナデする。端部はとがり気味にまるく納める。(47) は口縁部外面をわずかにヨコナデし、外面に面をもつ。(48) は白磁椀である。体部は丸みをもって内湾し、口縁端部は小さな玉縁を持つ。口縁端部付近はヨコナデ。器壁は薄い。白磁椀Ⅱ類に相当する。いずれも斎宮Ⅲ－３期に属するとみられる。

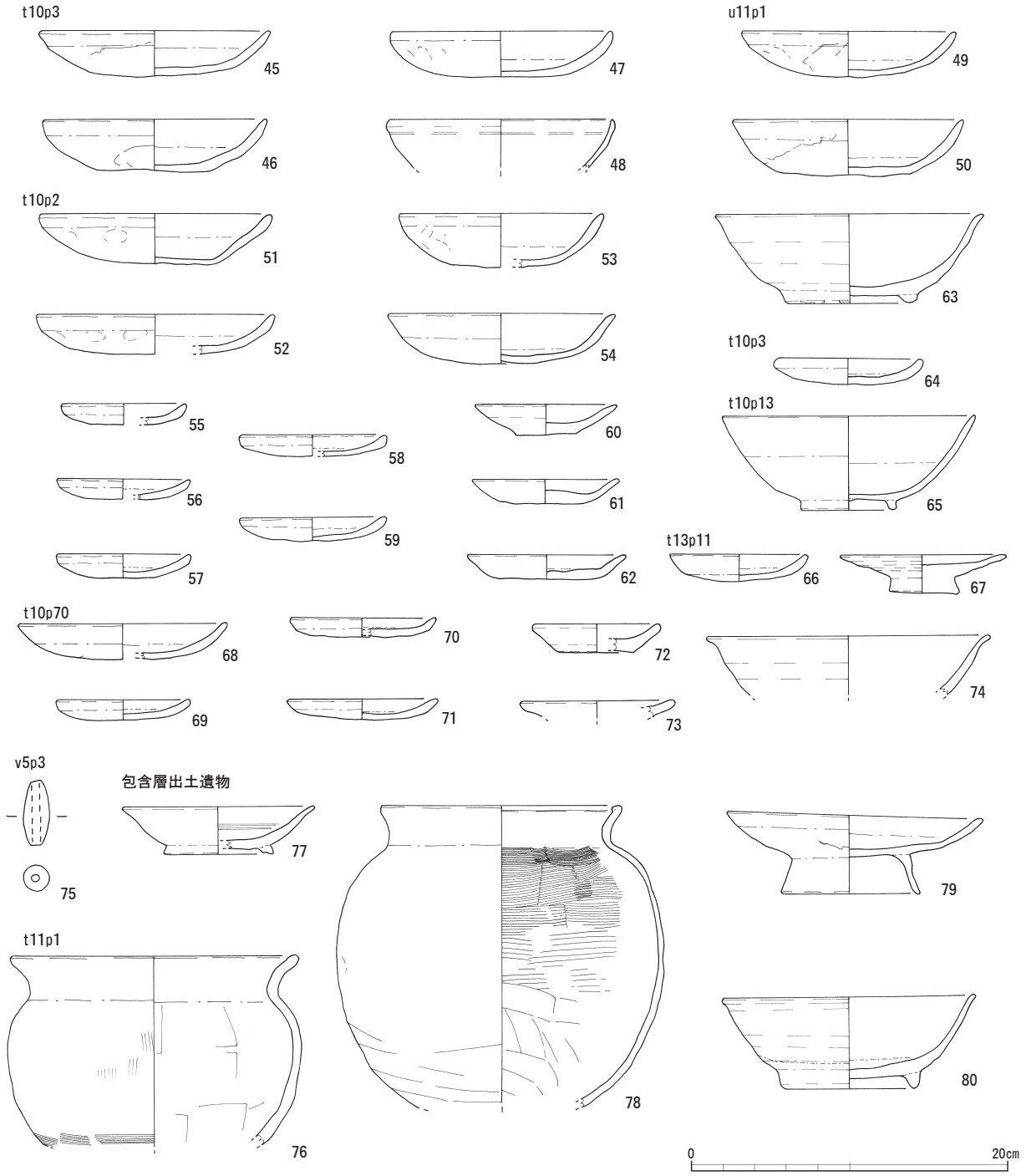
u11p1 出土遺物（49・50）　(49) (50) は土師器杯である。(49) は内湾する口縁部で、口縁部直下をヨコナデし、端部に面をもつ。(50) は口縁部が外傾し口縁端部直下をヨコナデすることで、外面と内面に面を持つ。斎宮Ⅲ―２期に属するとみられる。

t10p2 出土遺物（51～63）　(51) は土師器杯である。器壁は底部からやや内湾して口縁部へとつながり、口縁部直下をわずかにヨコナデして端部外面に



第Ⅱ－４図　第183・184次調査　遺物実測図（１）(1:4)

面をつくる。その下部は指頭圧痕の見られるナデ調整。完形品である。(52) は土師器皿である。器壁は緩やかに内湾し口縁部は端部直下をヨコナデして外面に面を持つ。全体に白っぽい。(53) は土師器杯である。器壁は内湾し、口縁部は端部直下をヨコナデして外面に面をもつ。(54) は土師器杯である。口縁部は外傾して端部をヨコナデする。全体に白っぽい。(55)～(59) は土師器小皿である。(55) は口縁端部をつまんでヨコナデし、外面に面を持つ。(56) は口縁端部をわずかにヨコナデし、端部外面に面をもつ。(57) は口縁端部をわずかにヨコナデし、端部外面に面をもつ。(58) は口縁端部をわずかにヨコナデし、端部外面に面をもつ。(59) は口縁部をわずかにつまんでヨコナデし、端部外面に面を持つ。(60)～(62) はロクロ土師器小皿である。(60) は口縁端部は丸くおさめ、底部には糸切痕が



第Ⅱ－５図　第183・184次調査　遺物実測図（２）(1:4)

明瞭にみられる。焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。(61) は器壁が外傾し、口縁端部は丸くおさめる。内面中央がやや盛り上がり底部には糸切痕が明瞭に残る。(62) は口縁部がやや外反し端部は丸くおさめる。底面には明瞭な糸切痕が見られる。(63) 陶器山茶椀である。器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。高台は太く低短で、明瞭なモミガラ圧痕が認められる。尾張型第４型式に並行するものとみられ、斎宮Ⅲ－４期にあたると考えられる。以上の土器は出土状況から高い一括性が認められる。

t10p3 出土遺物（64）　(64) は土師器小皿である。口縁部外面をわずかにヨコナデし、外面に面をもつ。

t10p13 出土遺物（65）　(65) は瓦器椀である。体部はゆるやかに内湾し、口縁部は直立して端部はややとがり気味に丸くおさめる。器壁の遺存状況が悪く、暗文の状況は判然としない。

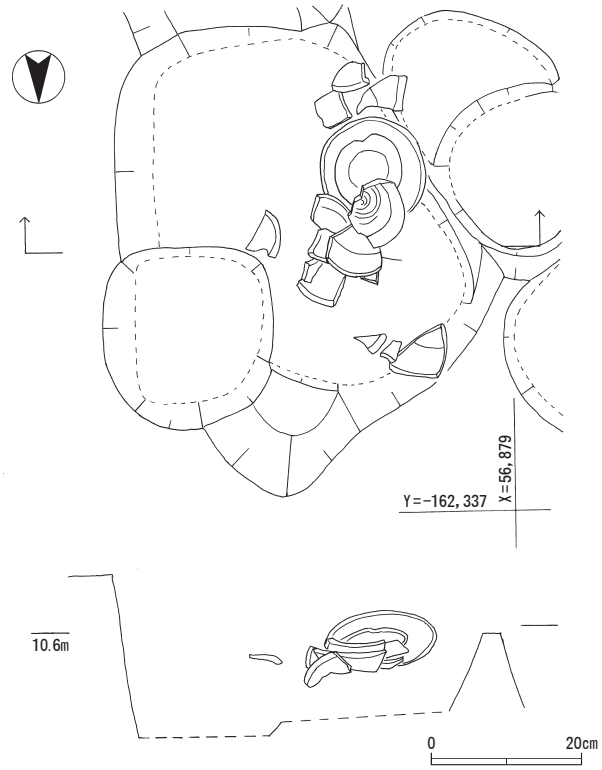
t13p1 出土遺物（66・67）　(66) は土師器小皿である。口縁端部をヨコナデし、端部はまるくおさめる。(67) はロクロ土師器の台付皿である。わずかに口縁部がななめ上方に持ち上がる皿部に柱状の脚が続く。脚部の底面には明瞭な糸切痕が認められる。

t10p70 出土遺物（68～74）　(68) は土師器皿である。やや内湾する器壁に口縁端部は丸くおさめる。口縁端部直下はヨコナデし、外面に面をもつ。軟調で器壁の残りは悪い。(69)～(71) は土師器の小皿である。(69) は口縁部をヨコナデし、わずかに外面の口縁直下に面を持たせる。(70) は底部からごく短い口縁部を立ち上げ、ヨコナデする。(71) は口縁部を斜めにヨコナデし、端部は丸くおさめる。(72) (73) はロクロ土師器小皿である。内外面はロクロナデ、底部には糸切痕が残り、口縁端部は丸くおさめる。(74) は陶器山茶椀である。器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反して口縁端部は丸くおさめる。シャープなつくりだが、胎土に８㎜程度の砂礫を含み、施釉の痕跡は認められない。斎宮Ⅲ－３期以降と考えられる。

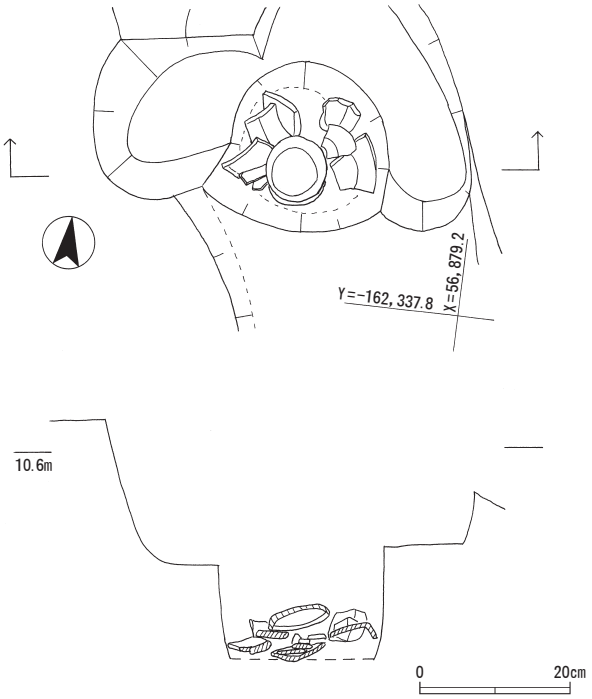
v5p3 出土遺物（75）　(75) は土錘である。

t11p1 出土遺物（76）　(76) は土師器甕である。口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。胴部から口縁部下部への煤の付着が著しい。

包含層出土遺物（77～80）　(77) は緑釉陶器椀で



第Ⅱ－６図　第183・184次調査
t10p2 遺物出土状況（1:10）



第Ⅱ－７図　第183・184次調査
t10p70 遺物出土状況（1:10）

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	登録番号
1	灰釉陶器	皿	SB10770	底径 6.8 残高 1.6	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:青白橡989 素地:にぶい黄橙10YR6/3	底部 4/12	004-02
2	灰釉陶器	椀	SB10770	底径 7.1 残高 1.5	外面:ロクロナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部 6/12	004-01
3	土製品	土錘	SB10770	長さ 5.2 幅 1.8	外面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	完形	010-08
4	土製品	土錘	SB10770	長さ 4.7 幅 1.2	外面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	ほぼ完形	010-09
5	土製品	土錘	SB10770	長さ 3.6 幅 1.3	外面:ナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	両端部欠け	011-01
6	製塩土器		SB10771	底径 14.0 残高 6.9	外面:オサエ・ナデ 内面:工具ナデ・ナデ・オサエ	やや密	良	にぶい橙7.5YR6/4	底部 2/12	010-04
7	灰釉陶器	椀	SB10773	底径 7.0 残高 1.4	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部 1/12	004-04
8	ロクロ 土師器	台付 小皿	SB10773	口径 11.9 残高 1.1	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	004-03
9	土製品	土錘	SB10773	長さ 3.4 幅 1.2	外面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	両端部欠け	011-03
10	土師器	皿	SB10774	口径 14.3 残高 1.8	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部 1/12	004-05
11	土師器	小皿	SB10775	口径 9.4 器高 1.5	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	004-06
12	土師器	皿A	SK10799	口径 19.7 器高 2.6	外面:ヨコナデ・ヘラケズリ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12	002-06
13	土師器	杯A	SK10793	口径 12.6 器高 2.6	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	001-04
14	土師器	甕	SK10793	口径 14.6 残高 3.6	外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ハケメ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部 5/12	001-05
15	土製品	土錘	SB10773	長さ 6.0 幅 2.1	外面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	ほぼ完形	010-07
16	土師器	杯A	SK10794	口径 15.0 残高 2.5	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 4/12	002-09
17	土師器	椀A	SK10794	口径 15.3 器高 3.3	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ミガキ(暗文)	密	良	にぶい黄橙7.5YR6/4	口縁部 1/12	002-02
18	土師器	甕	SK10794	口径 12.8 残高 6.7	外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ハケメ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	003-01
19	土師器	甕	SK10794	口径 19.7 残高 7.2	外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ハケメ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12未満	003-02
20	灰釉陶器	段皿	SK10794	口径 14.5 残高 1.6	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:砂色800 素地:灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12未満	002-01
21	灰釉陶器	椀	SK10794	底径 6.9 残高 2.3	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ・糸切痕	密	良	釉:鶸茶815 素地:灰黄2.5Y6/2	底部 3/12	002-08
22	土師器	杯A	SK10791	口径 14.1 器高 2.9	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	ほぼ完形	001-01
23	土師器	皿A	SK10791	口径 14.6 器高 2.0	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 3/12	001-06
24	土師器	甕	SK10791	口径 16.2 器高 13.4	外面:ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 8/12	001-03
25	土師器	甕	SK10791	口径 17.6 残高 4.6	外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ハケメ	密	良	淡黄2.5Y8/3	口縁部 5/12	001-07
26	土師器	甕	SK10791	口径 16.4 器高 14.9	外面:ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ 内面:ヨコナデ・ハケメ・ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 11/12	009-02
27	土師器	皿	SK10778	口径 11.4 器高 1.9	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5Y6/6	口縁部 2/12	006-01
28	土師器	杯	SK10778	口径 14.3 器高 3.9	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 3/12	006-02
29	灰釉陶器	椀	SK10778	底径 6.3 残高 3.3	外面:ロクロナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	素地:灰黄2.5Y7/2	底部 7/12	005-07
30	土製品	土錘	SK10778	長さ 3.8 幅 1.6	外面:ナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	ほぼ完形	010-06
31	石製品	碁石	SK10778	直径 1.65 厚さ 0.5				明緑灰7.5GY8/1	ほぼ完形	010-05
32	土師器	椀	SK10780	口径 14.7 器高 4.0	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ	やや粗	良	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12	002-04
33	瓦器	椀	SK10780	底径 5.6 残高 1.5	外面:ナデ 内面:ナデ	密	不良	灰5Y5/1	底部 2/12	002-03
34	土師器	皿	SK10800	口径 15.7 器高 2.0	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12未満	003-03
35	灰釉陶器	椀	SK10800	底径 7.2 残高 3.0	外面:ロクロナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:璃寛茶983 素地:灰黄2.5Y6/2	底部 6/12	002-07
36	ロクロ 土師器	杯	SK10800	底径 5.2 残高 1.4	外面:ロクロナデ・ナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	底部 8/12	003-05
37	ロクロ 土師器	台付杯	SK10800	底径 6.8 残高 1.6	外面:ロクロナデ 内面:ヘラケズリ・糸切痕	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	底部 2/12	003-04
38	土師器	台付皿	SK10800	口径 9.2 残高 1.4	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	003-06
39	白磁	椀	SK10800	口径 15.5 器高 2.7	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:利休白茶812 素地:2.5Y7/3	口縁部 1/12	010-02
40	土師器	杯	SK10781	口径 14.1 器高 3.5	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 6/12	008-04

第Ⅱ－３表　第183・184次調査遺物観察表（１）

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	登録番号
41	土師器	椀	SK10781	底径 7.9 残高 3.4	外面:ロクロナデ・ナデ 内面:ロクロナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	底部 7/12	008-06
42	陶器	椀	SK10781	底径 5.1 残高 1.5	外面:ロクロナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	底部 11/12	008-05
43	土師器	皿	SK10798	口径 10.5 器高 1.3	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12	002-05
44	ロクロ 土師器	杯	SK10803	底径 3.3 残高 1.0	外面:ロクロナデ・ナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	底部 8/12	003-07
45	土師器	杯	t10 p3	口径 14.3 器高 3.0	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 9/12	005-05
46	土師器	杯	t10 p3	口径 14.0 器高 3.3	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	ほぼ完形	005-04
47	土師器	杯	t10 p3	口径 13.7 器高 2.9	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 5/12	005-03
48	白磁	椀	t10 p3	口径 13.9 残高 3.1	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:青白橡989 素地:灰黄2.5Y7/2	口縁部 1/12未満	010-03
49	土師器	杯	u11 p1	口径 13.3 器高 2.9	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	ほぼ完形	006-05
50	土師器	杯	u11 p1	口径 14.4 器高 3.6	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・オサエ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ完形	006-04
51	土師器	杯	t10 p2	口径 14.5 器高 3.0	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	浅黄橙7.5YR8/4	ほぼ完形	006-07
52	土師器	皿	t10 p2	口径 14.9 器高 2.5	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	灰白10YR8/2	口縁部 3/12	007-06
53	土師器	杯	t10 p2	口径 12.7 器高 3.4	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部 3/12	007-07
54	土師器	杯	t10 p2	口径 14.2 器高 3.2	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	007-01
55	土師器	小皿	t10 p2	口径 7.7 器高 1.3	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部 2/12	007-12
56	土師器	小皿	t10 p2	口径 8.2 器高 1.3	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	灰白10YR8/1	口縁部 2/12	007-04
57	土師器	小皿	t10 p2	口径 8.3 器高 1.5	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	007-03
58	土師器	小皿	t10 p2	口径 9.0 器高 1.4	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	灰白2.5Y8/2	口縁部 4/12	006-09
59	土師器	小皿	t10 p2	口径 9.1 器高 1.6	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	灰白2.5Y8/2	口縁部 3/12	007-09
60	ロクロ 土師器	小皿	t10 p2	口径 8.8 器高 2.0	外面:ロクロナデ 内面:糸切痕	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 8/12	006-08
61	ロクロ 土師器	小皿	t10 p2	口径 9.1 器高 1.6	外面:ロクロナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	口縁部 9/12	007-05
62	ロクロ 土師器	小皿	t10 p2	口径 9.8 器高 1.6	外面:ロクロナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰白10YR8/2	口縁部 4/12	007-02
63	陶器	山茶椀	t 10 p2	口径 16.7 器高 5.7	外面:ロクロナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:海松茶817 素地:灰黄2.5Y7/2	口縁部 2/12	004-09
64	土師器	小皿	t10 p3	口径 8.9 器高 1.7	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	ほぼ完形	005-02
65	瓦器	椀	t10 p13	口径 15.8 器高 6.0	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	不良	灰白7.5Y7/1	口縁部 5/12	005-01
66	土師器	小皿	t13 p1	口径 8.5 器高 1.8	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ完形	004-07
67	ロクロ 土師器	台付皿	t13 p1	口径 10.1 器高 2.5	外面:ロクロナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部 6/12	004-08
68	土師器	皿	t10 p70	口径 13.0 器高 2.3	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	黄橙10YR8/6	口縁部 2/12	007-13
69	土師器	小皿	t10 p70	口径 8.2 器高 1.4	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	ほぼ完形	008-03
70	土師器	小皿	t10 p70	口径 8.9 器高 1.3	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	口縁部 1/12	008-02
71	土師器	小皿	t10 p70	口径 9.1 器高 1.3	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	ほぼ完形	007-08
72	ロクロ 土師器	小皿	t10 p70	口径 7.7 器高 1.8	外面:ロクロナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部 3/12	007-11
73	ロクロ 土師器	小皿	t10 p70	口径 9.3 残高 1.0	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12	007-10
74	陶器	山茶椀	t10 p70	口径 17.5 残高 3.8	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	明褐灰5YR7/2	口縁部 3/12	008-01
75	土製品	土錘	v5 P3柱痕	長さ 4.1 幅 1.7	外面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	ほぼ完形	011-02
76	土師器	甕	t11 p1	口径 17.8 残高 12.0	外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ハケメ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 3/12	005-06
77	緑釉陶器	椀	包含層	口径 11.9 器高 3.0	外面:ロクロナデ・ナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:草色834 素地:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 3/12	010-01
78	土師器	甕	包含層	口径 15.0 残高 19.2	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ・ヘラケズリ 内面:ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	密	良	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 9/12	009-03
79	土師器	台付杯	包含層	口径 15.9 器高 5.3	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 4/12	008-09
80	灰釉陶器	椀	包含層	口径 15.6 器高 5.9	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:青白橡989 素地:灰黄褐10YR6/2	ほぼ完形	009-01

第Ⅱ－４表　第183・184次調査遺物観察表（２）

ある。口縁部はゆるやかに外反し口縁端部は丸く収める。低短な高台は内面に沈線を持ち、見込み内面には２条の沈線がめぐる。全体にひずみがあり、破面に緑釉が付着していることから、焼成段階で割れがあったことがうかがわれる。近江産と考えられ、時期は斎宮Ⅲ－１期頃と考えられよう。(78) は土師器甕である。球形にちかい胴部から外頸する頸部が立ち上がり、口縁端部は上方に面を持ち、内側に折り曲がっておさまる。(79) は台付坏である。ゆるやかに外側に開く杯部は口縁端部のみヨコナデし、わずかに外反する。高台部は高く立ち上がり、ヨコナデ調整。斎宮Ⅱ－４期～Ⅲ－１期の遺物と見ておく。(80) は灰釉陶器椀である。器壁はあまり丸みを持たず口縁部は軽く外反し、端部はまるくおさめる。底部は太めで短い高台がつき、釉薬はツケガケ。斎宮Ⅲ－１期までにおさまる。

５　まとめ

（１）本次調査区の建物配置について

今回の調査区で検出した堀立柱建物を概観したとき、以下の３群に大別できよう。

斎宮Ⅱ－１期　（ＳＢ0307、ＳＢ10289、ＳＢ10299）

柱掘形　　一辺0.6m～0.7mの隅丸方形
柱間寸法　2.1m～2.4m（７尺～８尺）
建物方位　Ｎ４～６°Ｗ

斎宮Ⅱ－３～４期　（ＳＢ10290、ＳＢ10770、ＳＢ10771、ＳＢ10772）

柱掘形　　一辺0.6～0.2mの隅丸方形
　　もしくは直径約0.2mの略円形
柱間寸法　1.8～2.3m
建物方位　約Ｎ２°Ｗ～約Ｎ６°Ｗ

斎宮Ⅲ期　（ＳＢ10773、ＳＢ10774、ＳＢ10775、ＳＢ10776、ＳＢ10777）

柱掘形　　直径約0.2mの略円形
柱間寸法　2.0～2.2m
建物方位　約Ｎ３°～５°Ｗ

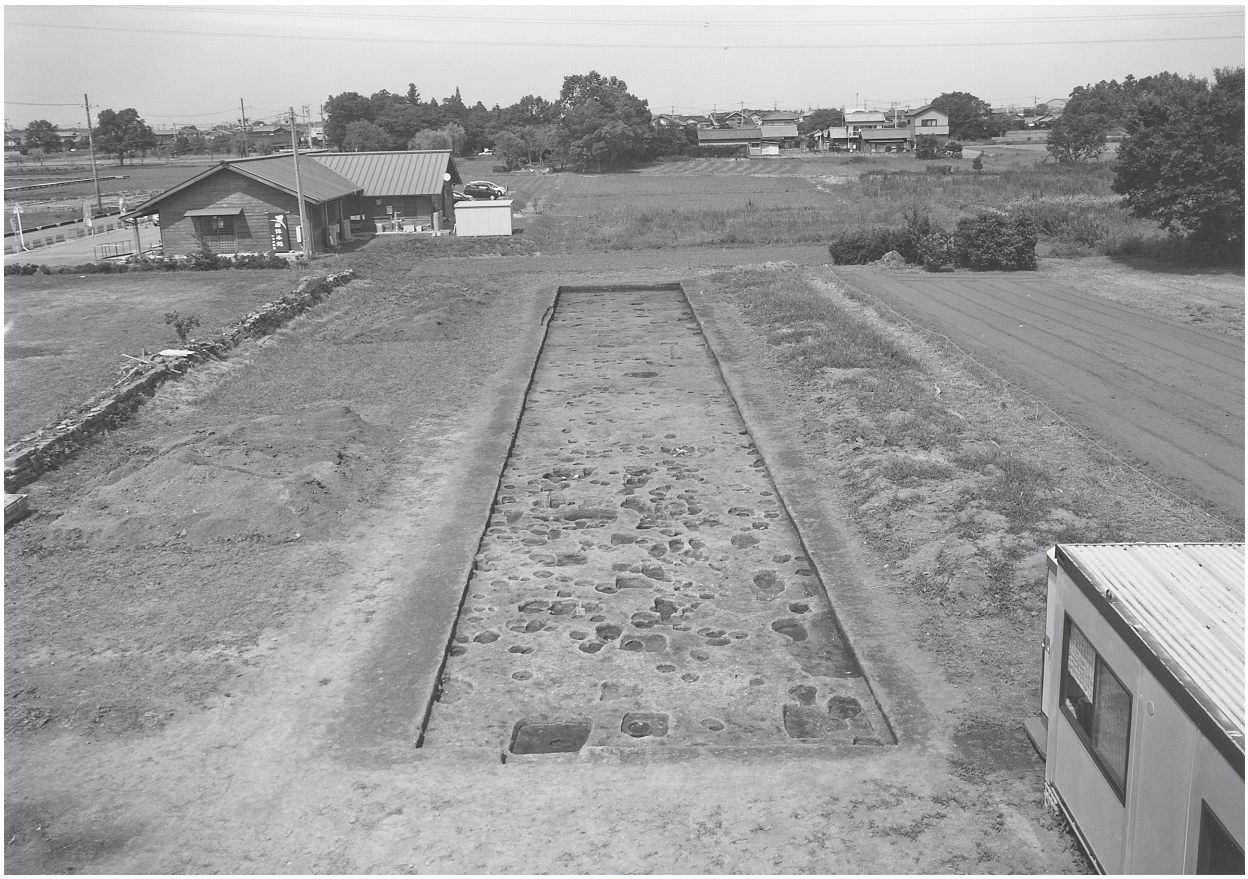
このうち、第１群に属するＳＢ10289、ＳＢ10299は建物の東西幅が一致するのに加え、梁間の柱通りがほぼ一致し、柱間寸法、柱堀形のいずれも共通性が高いことから、相互に関連する建物であると考えられる。建物間の距離は、ＳＢ10289の南側庇柱列とＳＢ10299の北側柱列間の距離は19.0m（約64尺）である一方、双方の南側柱列間の距離は26.7m（約90尺）である。また、さらに、ＳＢ10299の南側柱列は、御館区画南辺区画道路北側溝から北へ14.8m（約50尺）に位置し、西側柱列は想定されている西辺区画道路東側溝から東へ35.6m（約120尺）に位置している。このことから、ＳＢ10289、ＳＢ10299は方格地割を基準に配置が計画された建物である可能性が高いと考えられよう。ただし、ＳＢ10289、ＳＢ10299の主軸方向はＮ６°Ｗで、方格地割の方向であるＮ４°Ｗから２度ずれており、注意を要する。また、斎宮Ⅱ期後半になると掘立柱建物の柱間寸法が完好な尺寸から外れ始めるとともに、柱掘形が隅丸方形から略円形に、また直径も0.6m前後から0.2mに変化する。こうした変化はこれまでも発掘調査時に注意されてきたことであるが、改めて確認できたと言えよう。

（２）御館区画における建物の消長

御館区画の南半分については、発掘調査によって様相が判明してきている。平安時代前期においては、本調査区の位置する西側においては方格地割を基準とした建物が配置されていた可能性がある一方で、東側においては同様の建物配置は認められず、同一区画内においても西側と東側で異なる建物配置がとられていた可能性がある。一方、平安時代後期においては御館区画内でも南側の南辺道路に近い部分に掘立柱建物が集中している様子が看取できる。同様の傾向は御館区画の東側に隣接する柳原区画においても認められる。さらに、本調査区においては、包含層出土遺物も含め、もっとも時期が下る遺物は斎宮Ⅲ－４期に属するものであった。すなわち、御館区画においては、12世紀までは土地の利用が継続していく可能性が高いと考えられる。

斎宮の方格地割内部においては、斎宮Ⅲ－１期以降、牛葉東区画に内院の機能を残しながら、徐々に方格地割の外部へ機能を移転ないし分散させていったという指摘がある。御館区画で実施した本調査の結果はこれまでのこうした方格地割の消長と一致するものであり、方格地割内部の土地利用について、再確認できたものと評価できよう。

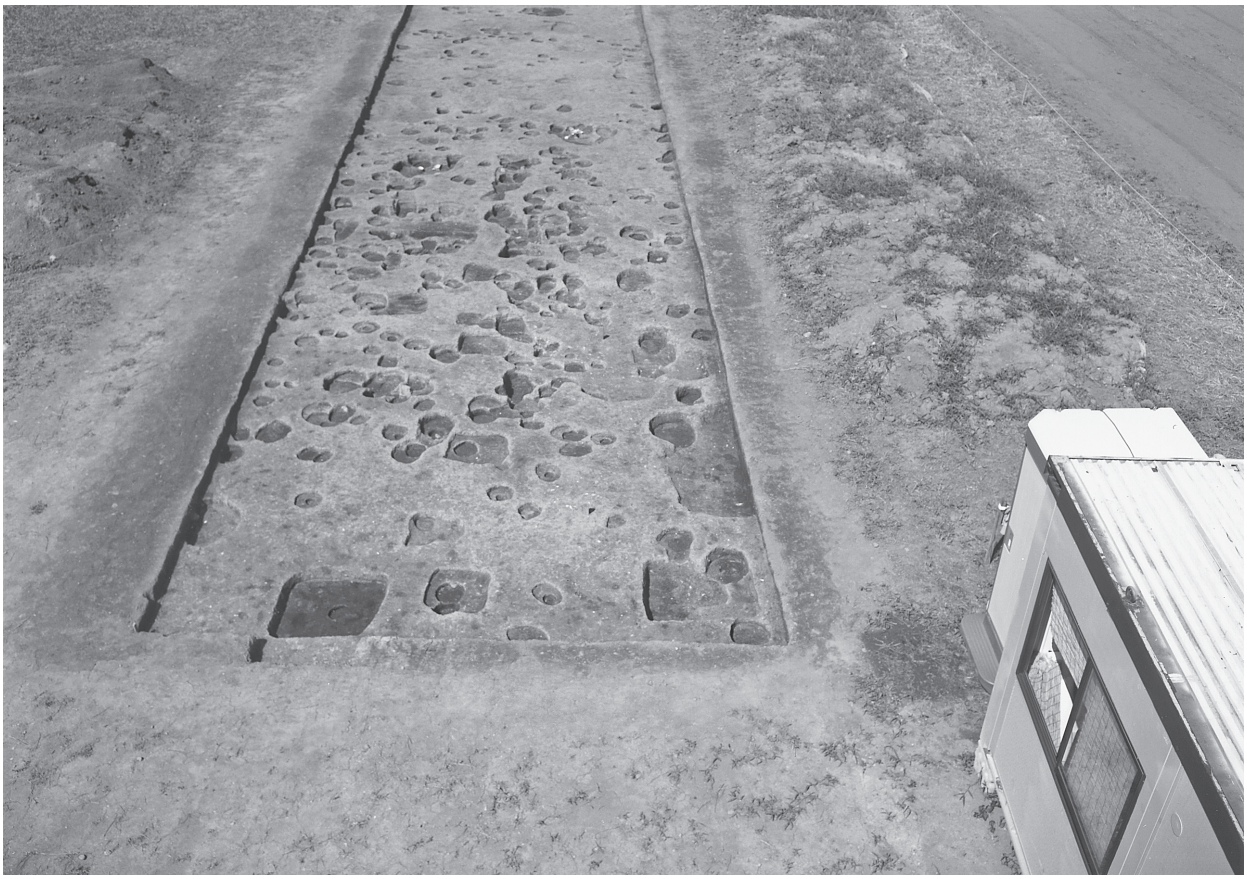
写真図版１



第183次調査全景（南から）

第184次調査東トレンチ全景（北から）

第184次調査西トレンチ全景（北から）



ＳＢ10299（南から）

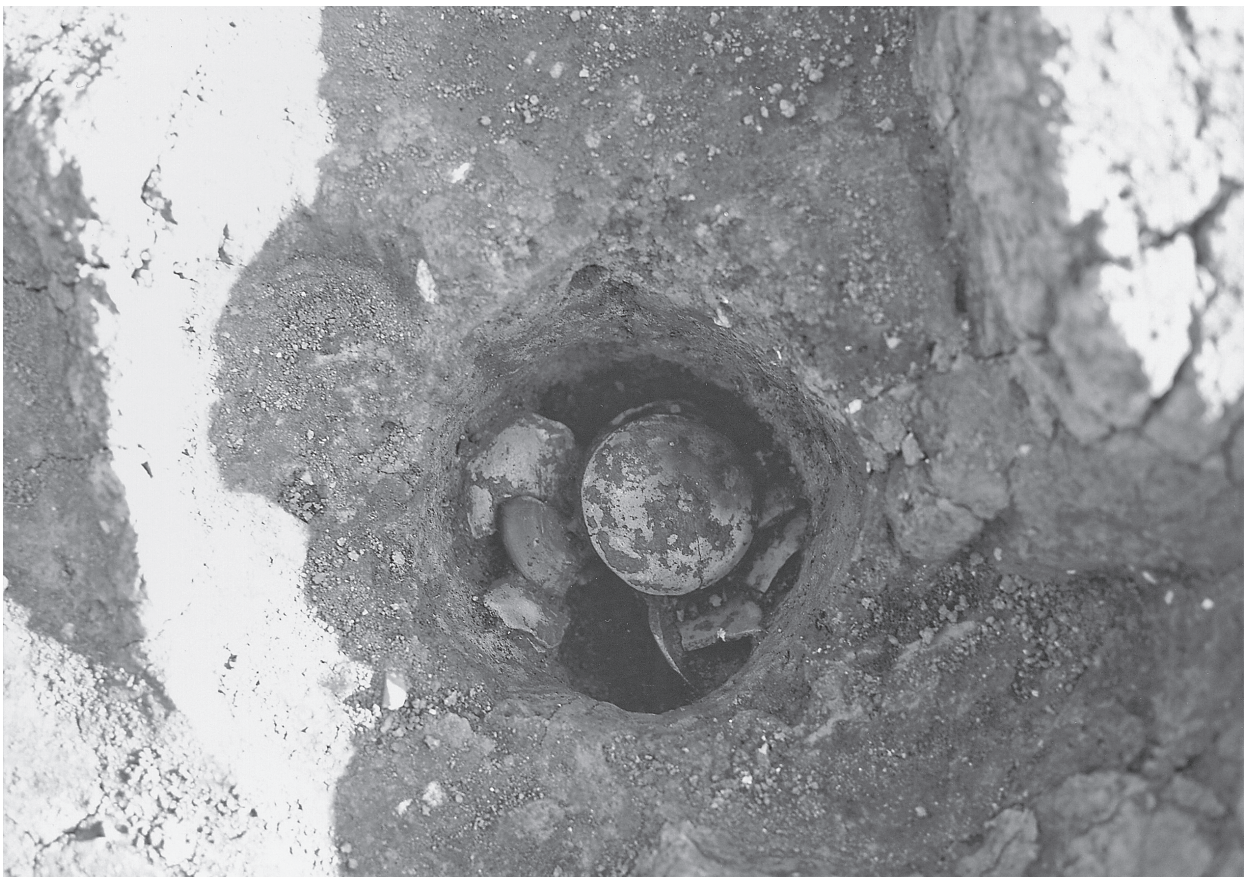
ＳＢ10289（西から）

写真図版３

ＳＢ10770、ＳＢ10773、ＳＢ10776（西から）

ＳＢ10770、ＳＢ10773、ＳＢ10776（北から）

t10p2 遺物出土状況（北から）



t10p70 遺物出土状況（北から）

写真図版５

t10p2出土遺物

t10p70出土遺物

6

12

65

77

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせいにじゅうろくねんどはっくつちょうさがいほう
書名	史跡斎宮跡　平成26年度発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊藤文彦
編集機関	斎宮歴史博物館
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL0596-52-7027
発行年月日	西暦　2016年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
斎宮跡（さいくうあと）	多気郡（たきぐん）明和町（めいわちょう） 斎宮（さいくう）・竹川（たけがわ）	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	20140723 ～ 20150206	242.4㎡ （第183次） 163.3㎡ （第184次）	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡 第183・184次	官衙	平安	掘立柱建物 溝　土坑	土師器 須恵器 灰釉陶器　山茶椀 ロクロ土師器　白磁 志摩式製塩土器 土錘	平安時代の初頭から末にかけての掘立柱建物群を確認

要約	平安時代斎宮の方格地割でいう「御館区画」の南西部の発掘調査である。平安時代前期から後期にかけての建物11棟のほか、土坑や溝を確認した。調査区内においては、平安時代前期には御館区画全域を利用して建物を配置する状況見られたのに対し、平安時代後期になると、建物群は御館区画南辺道路に近接する調査区南側に集中する状況が見られた。また、本調査区では12世紀を下る遺物は認められず、御館地区の土地利用は平安時代末を下限とする可能性が高いことが明らかになった。

史　跡　斎　宮　跡
平成26年度
発 掘 調 査 概 報
2016年３月25日
編集・発行　斎 宮 歴 史 博 物 館
印　　刷　光出版印刷株式会社